

遠距離介護が、見えてくる

パオッコ活動現場より⑥

NPO法人パオッコ ～離れて暮らす親のケアを考える会～ 太田差恵子

先日、機会があつて「炊き出し」ボランティアに参加しました。ホームレスの方たちに食事を提供するものです。私が参加したのは、初めてです。

肌寒さを感じる秋の夕刻の都内の公園。あたりはもう暗くなつていました。食事を待つ列は300人ほどでしょうか。私は、もくもくとご飯をよそいました。汁物のおかずをご飯にかけます。汁物にはたくさん種類の野菜が入っていました。私は調理ボランティアには参加していませんが、ジャガイモやニンジン、カボチャなどの下準備はさぞ大変だろうと頭が下がります。私もいたしましたが、からだがあたたまりとっても美味し

い。

行列をなす人たちの年代は老若幅が広く、圧倒的に男性でした。「家」のない人も限らないようです。3回、4回と並び、おかわりをする人も。

この人たちは、さまざまな事情で、「炊き出し」を利用するようになったのでしょうか。まったく身よりのいない人もいます。ところが、高齢の人には、別居する子や親族がいるかもしれない。若年、中年の人には、どこかに親御さんがおられるかもしれない。勤めていた会社が倒産したり、リストラされたり、諸々のきっかけで人生は大きく変わっていくのだろうと思います。知り合いの大学生から聞いた

話です。彼のバイト先で働く人

たちのなかには、いわゆる「フリーター」の人たちもかなりいるそうです。働いていても、正規雇用ではないため、勤務先の社会保険に加入することはできない。

どうやら、国民健康保険に加入していない人も少なくないといふのです。「国民皆保険」の日本の社会で……。

私も「フリーランス」として働いているので、国民健康保険に加入しています。保険料は安くはありません。東京23区の場合、誰もが支払う「均等割」が年額3万9900円。これに住民税をもとにする「所得割」がプラスされます。計算方法は自

治体によって異なり、負担も変わってきます。全市町村を対象にした毎日新聞の調査によると、2008年度の国民健康保険の保険料は、最大3・6倍の地域格差が生じていたそうです。住んでいる自治体によって、あまりにも大きな差があることには唖然とします（介護保険料も同じですが）。

もちろん私は、加入することは義務だし、また病院にかかったときに100%負担になったらたまらないので、保険料は支払っています。しかしフリーターの人たちのなかには、「払うゆとり」がなかったり、若いゆえに自身の健康を過信していたりする人もいます。多少体調を崩しても「根性」で直すようです。が、「風邪」なら根性（というか時間の経過）で完治するかもしれないけれど、「肺炎」になったり、もっと重大な病になったり、大けがをしたりしたら、いったいどうするのでしょうか。

国民健康保険証を持ってなく

て、運転免許も取得していないと、「身分証明書」がなくて困ることがあると聞きます。たとえば、レンタルDVDショップの会員にさえもなれないと……（自身の健康を過信している層では、そちらのほうに支障を感じる人もいるようです）。「炊き出し」に並ぶ人々を見ながら、彼らの社会保険はどうなっているんだろう……、と思いました。

健康保険料については減免などの制度がありますが、実際、日々の生活に追われていると、そのような情報に出会うことも

なく、一気に「未納」へと流れてしまうのかもしれない。私たちNPO法人パオッコでは、離れて暮らす親をケアする方法の情報発信をしています。遠距離介護をきっかけに退職や転職を選択する人もいます。実際、炊き出しの行列のなかにも、介護離職した人が含まれているかもしれません。

要介護者となった親本人の生活を少しでも快適なものにするには何をすればいいか。家族が背負い込みがちです。けれども家族といつても、万能ではなく、何でもかんでもはできません。

たとえば、「こっちに帰ってきて、一緒に暮らそうよ」と親から進言されるかもしれない。心身の弱った親から願われると、仕事を辞めてでも帰って傍に暮らしたいという気持ちになることもあるでしょう。食事やトイレの介助が必要であれば、なおさらです。認知症の症状があらわれ、徘徊をするような事態であれば、「同居」以外の選択肢を見つけることは難しくなってくる

ることもあります。それでも、自身が仕事を辞めて介護を行うとすれば、「何で食べていくか」、収入源を考えることは必須です。とりあえずは、親の年金で何とかなるといふ人もいます。けれども、年金は本人が死亡すればストップします。その後は、何で食べていくのでしょうか。

「深く考えても仕方ない。何とかなさるさ」という考え方もあります。確かに国民健康保険に減免制度があるように、所得が大幅に減ったり、なくなったりした場合、生活保護をはじめ、さまざまな制度があります。が、自ら調べ申請しなければ、向こうから制度はやってきません。介護保険のサービスだって同じ。申請し、認定されたいうえで、事業者と契約しなければ何も使うことはできません。

そういうことを何も考えず成り行きまかせにことを進めるのは非常に危険です。大きすぎるリスクです。もちろん不安定な職への移行原因全体の中で「介

護」は多くないかもしれない。原因やきっかけが何であれ、それぞれの事情。彼らに責める気持ちはありません。けれども、健康保険に未加入の層が相当数いると思うと、「何かがおかしい」と思わざるをえません。日本の「皆保険」制度は世界的にみて、すばらしい制度だといわれています。けれども、実態としてザル状態とすれば、改めなければならぬでしょう。

「炊き出し」に初めて参加した私には、世代を問わず貧困が広がっている現場を目の当たりにして、考えさせられることが多々ありました。彼らにとっては、親族の介護を心配しているところではないでしょう。自分自身がどこで寝て、どこで食事を得るかが最優先課題のはずです。

生きていくためには、まずは自身の安定した生活基盤が必要です。自分が不安定ななかで、親に笑顔を与えることなんて無理。人間はそれほど器用でも万能でもないと思うのです。

NPO法人パオッコ ～離れて暮らす親のケアを考える会～

親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。そんな状況のなか、親の心身に衰えが生じると子世代はどうしたものかと悩みます。パオッコは「ひとりの経験はきっとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有。ぜひ、ホームページに遊びにきてください！

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-37-8
本郷春木町ビル9F インキュベーションハウス内
ホームページ <http://paokko.org>